

三三八 この学は、小さくこれを用ふれば、則ち以つて身を持すべく、以つて家を斉ふべし。大きくこれを用ふれば、則ち国を治め天下を平らかにし、亦且つ綽として余裕あり。

此學也、小用之、則可以持身、可以齊家、大用之、則治國平天下、亦且綽有餘裕矣、

【訳】今私たちの学んでいる孔子の学問は、小さく身近なところで發揮されれば、我が身を保持し、家庭を平穩に保つことができる。大きく広いところでこれを実行すれば国（地方）を治め、世の中を平和にして、なおかつゆつたりとして余裕がある。

三三九 「雲深處」の三字、此れぞ是れ予の友潜庵、身、曾つて幽屏中にありて作りし所。蓋し以つて其の事を書し、其の志を寓するなり。

雲深處三字、此是予友潜菴身曾在幽屏中所作、蓋以書其事寓其志也、

【訳】「雲深處」の三字は、これこそ私の友人春日潜庵が、かつて安政の大獄で捕らえられ洛北紫野の雲野院に幽閉されていた時に作った言葉である。たぶんその事を書いて、潜庵のその時の志を書き表したものだろう。

三四〇 予、今これを室に掲げるは、亦將に時を避け跡を遁れて吾が志を養はんとするなり。

予今掲之於室者、亦將避時遁跡而養吾志也、

【訳】私が今これを室に掲げているのは、時勢や世の動向からは逃れて、自らの志を育てようとしているからである。

三四一 世に出で世に処する、本定則なし。志を養ひ義を行ふ、何ぞ成心あらんや。

出世處世、本無定則、養志行義、何有成心、

【訳】世間から離れたり、世間に出て、世間でうまく生きて行くことについては定めたものはない。志を養い、道義にそったことを行っていく。そのことをやっていくのに、私の心の中に下心やもくろみはない。

三四二 其の義を行ふや、將に以つて万物一体の心を物に推して我に慊ならんとするなり。其の志を養ふや、將に以つて待つ所あらんとするなり。

其行義也、將以推萬物一體之心於物而慊乎我也、其養志也、將以有所待也、

【訳】その道義を実践することは、天地万物は本来我々と一体のものであるという心を行動にあてはめて、私を満足させているのだ。そういった志を養うことが私の求めていることだ。

三四三 若し夫れ身を終るまで遭ふ所なければ、則ち此の志を抱きて永逝するも、固より亦憾む所なし。古人云はずや、「世を遁れて悶ゆる無く、是とせられずして悶ゆる無し。樂しければ則ちこれを行ひ、憂ふれば則ちこれを違る。確乎として其の抜くべからざるものは、潜竜なり。

若夫終身而無所遭、則抱此志而永逝、固亦無所憾、古人不云乎、遁世无悶、不見是而无悶、樂則行之、憂則違之、確乎其不可拔者、潜龍也、

【訳】もし生涯世に出る機会に会わず恵まれないままであれば、その志を抱いたまま死んだとしても、元より憾むことはない。孔子が言っているのではないか。「世間から隠れていても悶えず、よしとされなくても悶えず、楽しいことであればそのことを行い、悲しいことであれば、そのことを遠ざける。決して奪うことができないものを持つて物に動じないのが潜龍である。

三四四 凡そ人は平生樂しむ所なかるべからず。惟樂しむ所をして以つて其の心を養ふに足り、而して邪辟に流れざらしむれば、則ち可なり。

凡人平生不可無所樂、惟使所樂足以養其心、而不流於邪僻、則可、

【訳】どんな人も常日ごろ楽しむことがないようなことではいけない。ただ楽しんでい
ることが、その人の心を育て、よこしまな心に流されなければそれでよい。

三四五 今夫れ山に遊び水を遊び、花を種る園に灌ぐも、亦以つて楽しむべく、
而も亦以つて害なかるべし。

今夫遊山翫水、種花灌園、亦可_ニ以樂、而亦可_ニ以無害矣、

【訳】今、山に行つて遊び川に行つて水とたわむれる。花を植え、花畑に水をやって楽
しむ。それらすることによつて害になるようなことはない。

三四六 然らば則ち書を読み義を講ずるの間、厭倦する所あれば、則ち此の数
件のごとく、時に或ひはこれを為すこと、亦必ずしも禁ぜざる所なり。

然則讀書講義之間、有所厭倦、則如_ニ此數件、時或爲之、亦所不必禁也、

【訳】そういうことから、書物を読み、講義をするとき、疲れてくれば、前に述べたよ
うなことを禁止するものではない。

三四七 試みに吾子に問ふ、抑人の人たるゆゑんのものを知れるや。

試問『吾子、抑知_ヤ人之所_ニ以爲_レ人者_ニ乎、

【訳】試しにあなたに問います。人が人であるわけを知っているか。

(20190105) 348

三四八 人の人たるゆゑんものは、徒に能く利に趨りて害を避くるの謂のみ
にあらざるなり。徒利に趨りて害を避くるは、則ち禽獸といへども尚ほこれを

能くす。

人之所_レ以爲_レ人者、非徒能趨_レ利而避_レ害之謂_二也、徒趨_レ利而避_レ害、則雖_二禽獸_一尚能之矣、

【訳】人が人であるということは、ただうまく利益を追求し、自分に害のあることを避けるというだけではない。そんなことは鳥や獣でもすることだ。

三四九 然らば則ち人の人たるゆゑんのは、果して何_レくに在りや。他なし、此の心に仁義を具_二ふ_一るの謂_二なり_一。

然則人之所_レ以爲_レ人者、果何在焉、亡_二他_一、此心是_二仁義_一之謂_二也_一、

【訳】それならば人が人であると言えるのは、どういうことであろうか。他でもない。その心に他人を思いやる「仁」と、人としての正しい道を生きる「義」の精神が備わっているかどうかである。

三五〇 是の故に道は仁義より至れるはなきなり。教へは仁義より尊きはなきなり。

是故道者無_二至_一於仁義_二也_一、教者無_二尊_一於仁義_二也_一、

【訳】このことから人の生き方として仁義よりすばらしいものはなく、その教えは仁義より尊いものはないのだ。

三五一 仁義の道、これを身に反_レりみれば、則ち心は其の正を得、身は其の脩を得て、復た悔_二ゆ_一べく恥_二づ_一べき事あることなし。

仁義之道、反_レ之於身、則心得_二其正_一、身得_二其脩_一、而無_二復_一有_二可_レ悔_一可_レ耻_一之事、

【訳】仁義の生き方は、これを自分自身についてふり返ってみると、心は他の人への思いやりができ、身は正しい行いができ、悔やんだり恥じたりするようなことは少しもな

い。

三五二 一身を以つて言へば、則ち安宅広居、心広たいはん体胖、坦坦蕩蕩、怨あんゆう尤あることなし、真に無上の福なり。

以一身而言、則安宅廣居、心廣體胖、坦々蕩々、無有怨尤、眞無上之福也、

【訳】世の中の一人一人にあてはめると、安らかでゆつたりとした生活ができ、心も体ものびのびと健やかで、おだやでゆつたりして、人を恨んだり責めたり決してしないので、本当にこの上ない幸せだ。

三五三 これを物に推せば、則ち家せいの齊ひ国治まり、天下和平、以つて動植の物、昆虫飛走の微に至るも、亦其の所を得ざるものなきなり。

推之於物、則家齊國治、天下和平、以至動植之物、昆蟲飛走之微、亦無不得其所者也、

【訳】このことをまわりのことにあてはめてみれば、家はととのい、国は治まり、世の中は平和になる。動植物でも、昆虫などの小さなものにまで、その恩恵に浴さないものはない。

三五四 是の故に凡そ人たるものは、仁義の教へに服さざるべからざるなり。

是故凡爲人者、不可不服仁義之教也、

【訳】だから、人であるなら仁義の教えを学びそれに従っていかなければならないのだ。

三五五 「書」三事を説く、正徳利用厚生を謂ふなり。

書説三事、謂正徳利用厚生也、

【訳】「書経」は三つの事を説いている。それは、自分の徳をただしていく「正徳」、人々に物資が円滑に行き渡るようにする「利用」、人々の生活を豊かにする「厚生」、の三つである。

三五六 天地開闢の始め、風氣未だ開けず、養生の道未だ備らず。是の時に方り神聖迭ひに興り、務めて利用厚生の具を創る。「易」に説く所の「象を尚び器を制する」の類のごときは是れなり。

天地開闢之始、風氣未開、養生之道未備、方是時神聖迭興、務創利用厚生之具、如易所説尚象制器之類是也、

【訳】世の始まりの時、人々はまだ未開で混沌の中にあつて、暮らしも定まっていなかった。この時に、神のようなすぐれた人が代わる代わるに出て来て努力して、利用、厚生 of しくみを作った。「易経」に説く「形を大事にして、器を制作する」のように。

三五七 降りて堯舜に及び、利用厚生 of 具略備はる。古人云はずや、「飽食暖衣、逸居して教ふることなければ、則ち禽獸に近し」と。是に於てか還又正徳の事を務む。

降及堯舜、利用厚生之具略備矣、古人不云乎、飽食暖衣、逸居而無教、則近於禽獸、於是乎還又務正徳之事、

【訳】時代は下つて、伝説の中国古代の帝王である堯帝と舜帝の時代になると利用厚生 of 仕組みはほぼ備わつてきた。しかし、古人（孟子）が言われているではないか。「食べたいだけ食べ、暖かい服を着て、働くことをせずぶらぶらしていて、教養がなければ、鳥や獸と同じようなものだ」と。この教えから考えても、人は自分の徳を積むことに努力しなければならぬのだ。

三五八 是れよりして後、利用厚生 of 道、日を逐ひて益備はるといへども、其の専ら務むる所のもの、要は正徳の上に在るを多と為す。是れ漢土の国となりなり。

自是而後、利用厚生之道、雖逐日_レ益備、而其所_レ專務_二者、要在正徳上爲多、是漢土之爲國也、

【訳】堯舜の時代から利用厚生は、日を追って備わってきたが、ひたすら努力してきたことは、それらが正徳の上にあるということ_二を大事にしてきたのだ。これはそのころの漢の国の国柄を示すものだ。

三五九 夫の西洋の国となりのごときは、則ち一世の人を駆りて、其の精神心思を芸術の末に尽くさしむ。技巧、日に精しく、新奇、日に競ふ。是れ乃ち終始、利用厚生_二の事を務めて止まざるものなり。而れども夫の正徳の道は、則ち漠然として聞くを蔑む。

若夫西洋之爲國、則驅一世之人、盡其精神心思於藝術之末、技巧日精、新奇日競、是乃終始務利用厚生之事、而不止者、而夫正徳之道、則漠然蔑聞焉、

【訳】あの西洋の国というのは、その時代の人の心を駆り立て、精神や思いを技術の極みにまで至らせた。技巧は日に人に日に精巧となり、目新しいことは日に日に競うように出てくる。すなわちこれは、何もかも利用厚生_二の事に努力しているということである。しかし、その正徳の道には、無関心で内容を聞いても蔑まずにはおれないようなものだ。

三六〇 予意へらく其の国を治むるや、信賞必罰、法を以つて維持するに過ぎず。而して其の人心を撰するは、則ち蓋し一耶蘇教あるのみ。

予意其治國也、不過信賞必罰以法維持、而其攝人心、則蓋有一耶蘇教耳、

【訳】私が思うのに、その国を治めるのに、信賞必罰の精神で法律をもって維持しているのにすぎない。そして、人々の心を正しく導こうとするのは、キリスト教の教えが一つあるだけだ。